

人生の真実を語る物語『グリーン・ノウの子どもたち』

白木麻美

(東海学院大学短期大学部)

要 約

イギリスの児童文学界で最高の名誉とされる「カーネギー賞」受賞作家、ルーシー・M・ボストンのグリーン・ノウ物語の第一作目「グリーン・ノウの子どもたち」で、作者が伝えたかった真実を検証した。

キーワード：ルーシー・M・ボストン グリーン・ノウ物語 グリーン・ノウの子どもたち

(2020.12.9 受稿 査読審査を経て 2021.2.5 受理)

はじめに

この物語は、イギリスの作家、ルーシー・M・ボストン(Lucy M. Boston)によって書かれた。出版されたのは1954年である。当時彼女は、既に62歳だった。しかも彼女はこれに続いて、1976年まで20年以上にわたり全部で6冊にもなる「グリーン・ノウ物語」シリーズを書き継いでいく。第4作目の『グリーン・ノウのお客様』(*A Stranger at Green Knowe*)は、イギリスの児童文学で最高の名誉とされるカーネギー賞を受賞している。この『グリーン・ノウの子どもたち』(*The Children of Green Knowe*)は、つまり、高齢女性作家による長篇連作の第一作なのである。

話の主な舞台は、実際に著者ボストン夫人が住んでいた家である。この家はマナー・ハウスと呼ばれ、ロンドンからも日帰りで十分訪れることができ、ケンブリッジに程近い、とある村に現在でも実在している。1120年に建てられ、イギリス国内において、最も古い家のひとつと認識されていることから、並みの家でないことは十分想像できるだろう。そこに登場するのが、そのグリーン・ノウの家に住む、自分のひいおばあさんを訪ねてやってくる、7歳の主人公の少年トーリーである。トーリーは、そこで、この家に三百年も前に生きていた、トービー、アレクサンダー、リネットの三きょうだいと不思議な交流を持つようになる。しかし、トーリーが、時間を超えて彼らと心が通い合うまでには、様々な過程がある。その過程において、彼は、現実の世界で体験するようないろいろな感情を味わうことになる。一見すると、古いお屋敷で繰り広げられる、おばあさんと少年の心温

まる交わりとか、過去の亡霊との非現実的な交流という印象を受けるが、この物語はそれだけにとどまっていない。むしろ、夢のような話のなかに、人間が生きていく現実の世界の厳しさが、脈々とうまく織り込まれ、さらに現実を越える心の世界が美しく繰り広げられていると言ってもいいだろう。この作品の中で、著者ルーシー・M・ボストンが伝えたかった真実を検証していきたいと思う。

トーリーの生い立ち

この話の主人公トーリーは、両親と遠く離れ、寄宿学校で生活している。実の母親は、既にこの世にはいない。トーリーは、父親と再婚した2度目の母親にはどうしても馴染めず、長期休暇も校長宅に預けられて過ごすなど、家族の愛に飢えた孤独な少年である。作品は、そのような七歳の少年が、冬休みに一人で電車に乗ってグリーン・ノウのひいおばあさんの家を訪ねる情景から始まる。列車の中にぼつんと座っている少年。冒頭から、その孤独な心の姿がくっきりと浮き出されている。今度の冬休みを、初めて自分の亡くなった本当のお母さんのおばあさん、つまりひいおばあさんの元で過ごせることになったトーリー。わずか7歳の男の子が、全身で現実を受け止めて耐えているかのようだ。

A little boy was sitting in the corner of a railway carriage looking out at the rain, which was splashing against the windows and blotching downward in an ugly, dirty way. He was not the only person in the

carriage, but the others were strangers to him. He was alone as usual.(1)(i)

【訳】(ii)

小さな少年が、外の雨を眺めながら列車の座席のすみに座っていた。雨ははげしく窓にふりかかり、はねかえって、汚らしく流れ落ちていった。列車の中の乗客は皆、彼の知らない人ばかりだった。少年は、いつものようにひとりぼっちだった。

トーリーは知らない場所で一人ぼつんといることに、好むと好まざるに関わらず、慣れっこになっている。周りの大人も、現にそのような彼のことを気に留める様子もないのだ。親元を離れて生活し、人に気を遣い、自己主張することなく存在する術が、身に付いているのかもしれない。電車で自分の向かいの座席に座っていた女性たちとのやり取りからも、そのような一面がうかがえる。

The two women opposite him were getting ready for the next station. They packed up their knitting and collected their parcels and then sat staring at the little boy. He had a thin face and very large eyes; he looked patient and rather sad. They seemed to notice him for the first time....(2)

【訳】

向かいの二人の女の人は、次の駅で降りる支度をしていた。編み物をしまい、荷物をまとめると、座りなおして、少年をまじまじと見つめた。少年はほっそりとした顔立ちで、とつても大きな目をしていて。我慢づよい、けれどどこか悲しげな表情だ。彼女たちは、今頃になってようやく、少年に気がついたようだ。・・・

トーリーのグリーン・ノウとの出会い

やがて列車は目指すペニー・ソーキーの駅に到着する。どしゃ降りの雨の中、迎えのタクシーでグリーン・ノウへ向かう道中、あたり一面洪水の様子を目にし、トーリーの不安はますます募っていく。いよいよ、タクシーがもうこれ以上進めないというところまで来て、運転手と歩き出したところに現れたのが、使用人のボギスである。出会って早々、自分をグリーン・ノウの家の者として接してくれたボギスのお陰で、トーリーはほっとし、ボートに乗り込んでグリーン・ノウの家を目指す。ランプを

手に持ち、ボートのへさきに座って、暗闇の中未知の領域に入り込んでいくと、ようやく闇に浮かび上がってきた家は、窓に明かりが全部ともされている。家の主人は、この明かりで少年を温かく迎える気持ちを表していたわけだ。このトーリーとグリーン・ノウの家との出会いは、いかにも幻想的かつ神秘的である(iii)。と同時に、トーリーにとって、それらの明かりは、暗闇から見出した希望の明かりのように感じたことだろう。

実際に家の中に足を踏み入れると、トーリーはその不思議な玄関の様子にすっかり面食らってしまう。「ひいおばさんが魔女だとしたら！」(18)と思ったほどだ。大きな古い鏡が3枚、枯れ枝から咲きほこる花々、本物の鳥の巣を肩に乗せている木彫りの子どもの像に至るまで、ユニークな装飾がそこかしこに施してあるのだ。ひいおばあさんのいる部屋に通されると、トーリーは、手入りの行き届いた快適なお城のような部屋に、夢見心地になる。安定感のある分厚い石の壁と温かみのある雰囲気は、トーリーが見物したことのある荒れた古城とは似て非なるものだ。7歳の少年といえども、その違いに気付くことができるのは、それまでの自分の体験あつてのことだろう。味気ない生活をしてきたからこそ、今自分が身を置いた状況の温かさ、ありがたさを実感でき夢見心地にもなれるのだ。グリーン・ノウは、トーリーが過ごしてきた寄宿学校とは正に対照的なのだ。

トーリーとオールドノウ夫人の出会い

ひいおばあさんと対面を果たしたトーリーは、物怖じするどころか、会話が次々と弾む。それは、ひいおばあさんとひ孫という血縁関係からという理由だけではなく、お互いどこか、話しが通じる共通点があることを示唆している。想像力豊かで、好奇心旺盛なトーリーにとって、到着したばかりのグリーン・ノウのお屋敷は、目に入るものがいちいち、ひいおばあさんに聞きたくなるようなもので溢れている。きっと、お屋敷自体が、トーリーにとっては、おもちゃ箱みたいなものかもしれない。そのように忙しく見聞きするトーリーは、初対面ですっかりオールドノウ夫人に馴染んでいる。二人の間には、違和感やごちなさといったものがまるでない。それは、オールドノウ夫人がどれほど歳をとってしようと、7歳の子どもが持っている純粋さやひたむきさを忘れていない人、つまり、理解できる人だからである。それまで、外の世界で揉まれてきたトーリーは、そのようなひいおばあさんの資質を、咄嗟に察知し心を開いたのだ。

その夜、眠りにつく前のトーリーが、どれほどほっとし、満ち足りていたかは想像に難くない。生まれて初めてひいおばあさんに会うことができ、自分の家と呼べる場所に来ることができたのだ。しかも、どちらも一目で、ずっと前から知っているような愛着を抱けるような存在なのである。トーリーは自分の居場所が出来たことが、きっと何よりも嬉しかったことだろう。

...Never in his life had he lain in such a room, yet it did not feel strange. He felt with all his heart that he was at home.(12)

【訳】

・・・トーリーは、このような部屋でそれまで一度も寝たことがなかったが、違和感はなかった。彼はすっかり自分の家にいるような気がしていたのだ。

翌朝目覚めてからのトーリーは、新たに見たり、聞いたり、感じたりしてみることで忙しい。ようやく朝ごはんの席についた時、トーリーは、3人の子どもと2人の女性の家族が描かれている、大きな油絵に気がつく。まるで彼らが生きていて、自分をじっと見ているように感じるのだ。そこでその絵に描かれている人物について、ひいおばあさんとやりとりをしていると、トーリーは、ひいおばあさんと自分の似通った境遇をも発見することになる。オールドノウ夫人もまた、孤独な幼少期を過ごしていたのだ。

‘Oh,’ said Tolly, interrupting, ‘that’s the bird-cage in my room. It’s the bird-cage in my room! It made such funny shadows on the ceiling when you put the night-light under it. Is the doll’s house Linnet’s?’

‘No, the doll’s house was mine when I was a little girl. I was brought up here by my uncle because I was an orphan.’

‘Did you have brothers and sisters?’

‘No; I played that I had. I was lonely. That’s why I put four beds in the doll’s house.’

‘Did you play that *they* were your brothers and sister?’ said Tolly, pointing to the picture. Mrs. Oldknow looked hard at him.

‘Yes, my dear. How did you know?’

‘Because I think that is what I shall play.....’(17)

【訳】

「あっ、」と、トーリーは口をはさんだ。「あれは、ぼくのへやの鳥かごだ。あの鳥かごだ！あの鳥かごの下に、おばあちゃんが夜用のろうそくをつけたら、天井におかしな影ができたやつだ。じゃあ、あの人形の家はリネットのものなの？」

「いいえ、あの人形の家は、幼かったときのわたしのものだったの。私には両親がいなくて、ここでおじさんに育てられたのよ」

「きょうだいはいたの？」

「いなかったわ。だから、いるつもりで遊んだのよ。さびしかったもの。だから、人形の家に四つのベッドを入れたのよ」

「じゃあ、この子たちと、きょうだいのつもりで遊んだの？」と、トーリーは絵を指差してたずねた。すると、オールドノウ夫人は、トーリーをじっと見つめた。

「ええ、そうよ。どうしてそれが分かったの？」

「どうしてって、ぼくもそうするだろうなと思うもの。・・・」

トーリーとひいおばあさんの共同生活は、正に、それぞれ恰好の仲間を得た形で展開されていくのである。そのような中、徐々に現れたり消えたりしながら、トーリーに新たな仲間が加わっていく。けれど、その仲間たちは、簡単には目の前に現れたりしない。まるで、トーリーを試すかのように、いろいろなサインを残しては消え、トーリーの行動を観察しているようだ。必死になって、なんとか仲間の正体を探ろうと試行錯誤している様子を、物知り顔で傍観しているのが、オールドノウ夫人である。彼女にはきっと、手に取るようにトーリーの感じていることが分かるのだろう。かつて、自分も、このグリーン・ノウの家で経験したようなことを、今、トーリーも経験しているに違いないのだ。何と言っても、このひ孫は、「この子は、生まれながらにここの子って感じがするわ。この子のどこかに、ここの家がぜんぶはいっているんですよ。この子が家じゅうをじぶんのものにしてしまうところが見たいわね」(47-48)と、オールドノウ夫人が表現するほど、トーリーは、あたかもグリーン・ノウの家そのもののような存在なのだ。長年、そこに暮らしてきたオールドノウ夫人にとって、グリーン・ノウの家は、手に取るように何でも分かるようなもののはずである。その家にやって来たばかりのトーリーとグリーン・ノウの家を引合いに出すということは、オールドノウ夫人の、

直感的にトーリーのことは何でも分かるという自信を表している。と同時に、彼女がトーリーに、並々ならぬ期待を抱いていることも示唆していると言えるだろう。だからこそ、ひ孫であるトーリーを、無駄に甘やかしたり、過保護にもしない。トーリーの好きなように、自由に屋敷や敷地内を探検させ、いろいろな体験をさせる。またごく自然に、トーリーに何でもありのままの事実を伝える。従って、オールドノウ夫人にとってつらい過去や悲しい事実も、トーリーにたずねられれば、最終的にはちゃんと話してあげるのだ。事実をベールに包んでしまうような生ぬるいことはしないのだ。

‘Stop putting swords through the bed-clothes,’ said Mrs. Oldknow in an ordinary voice.

‘Did Toby use it?’ asked Tolly solemnly.

‘He never stuck it into anyone, if that is what you mean. But he learnt to fence, and he wore it on Sundays when he went to church with his mother.’

‘Why doesn’t he want it now?’ Mrs. Oldknow looked at him with an uneasy wrinkled face. Then she sighed.

‘Because he’s dead,’ she said at last. (54)

【訳】

「ふとんを剣で刺すのはおよしなさい」と、オールドノウ夫人がいつもの声で言った。

「トービーはこれを使ったの？」と、トーリーはまじめくさってたずねた。

「あなたの意図することにもよるけど、トービーは決して剣で人を突いたことはなかったわ。だけど、フェンシングを習っていたから、日曜日にお母さんと教会に行くときは、剣を身につけていましたよ」

「どうしてトービーは今、剣がほしくないの？」オールドノウ夫人は、つらそうにしわくちゃの顔でトーリーを見つめた。それから、ため息をついた。

「死んでしまったからよ」と、ひいおばあさんは、とうとう言った。

そこには、著者ルーシー・M・ボストンの、死というつらい事実もきちんと伝えようとする、子どもへの真摯なまなざしが反映されていると言ってもいいだろう。

トーリーとグリーン・ノウの子どもたちの出会い

トーリーは、家の中のものや庭のものに触れ合ってい

くうちに、3きょうだいの気配を徐々に感じ取っていくようになる。そして、ひいおばあさんが予言したように、すっかりグリーン・ノウの家そのものを体現するほどに馴染んだ頃、ようやく“イチイの木の雪のテント”(144)で、彼らと出会うことができるのである。あたり一面、白銀の世界でのこの出会いは、いずれ溶けてしまう雪のように美しく儂げでありながら、太陽の光を受けてキラキラ反射する雪のように、眩しいくらいに光輝いているかのようだ。まるで、トーリーと子どもたちの天真爛漫さを象徴しているかのような場面である。

Inside was a high, tent-shaped room with branches for beams and rafters, lit with a shadowless opal light through the snow walls. In the centre, leaning against the bole of the tree, were Toby and Alexander, with Linnet sitting on the dry yew-needle carpet at their feet. It was Alexander of course who was playing, while a red squirrel ran up and down him, searching in his pockets for nuts. Toby was feeding the deer, the real deer,Linnet was playing with the lanky hare, making it stand up and dance to the music. Her little dog danced on its hind legs more vigorously than the hare to attract her attention.

Tory was afraid to breathe or move lest they should vanish, but their eyes were all on him, and they smiled..... (66-67)

【訳】

中は、枝が梁やたるきのように張られた高いテント型の部屋だった。雪の壁をすかして、明るいオパール色の光がさしこんでいた。真ん中には、木の幹にもたれている、トービーとアレクサンダーがいた。そしてリネットは、彼らの足元のイチイの枯れ葉のカーペットの上に座っていた。フルートをふいているのは、もちろんアレクサンダーだった。その間、一匹の赤いリスが、彼のポケットのナッツを探して、彼の体をかけあがったり、かけおいたりしていた。トービーは、本物の鹿にえさをやっていた。・・・リネットはひよろつとした野うさぎと遊んでいた。その野うさぎを立たせ、音楽に合わせてダンスをさせて。・・・

リネットの小犬も、リネットの気をひくために、野うさぎよりも元気に、後ろ足で立っておどった。

トーリーは、彼らが消えてしまわないかと、息をする

のも、身動きするのも心配だった。しかし、3人の目はみなトーリーのほうに向けられ、そして笑っていたのだ。

しかし、この3きょうだいも、実は三百年ものつぐの昔に、ペストで次々と数時間のうちに、母親と共に死んでしまっているという悲しい事実がある。トーリーの目に映るようになったといっても、実体を伴わない霊という存在なのである。だから当然のごとく、ふとした瞬間に、ずっと消えてしまう心もとなさがある。結果として、トーリーは、彼らの没に一喜一憂せざるをえないのだ。この3きょうだいも、トーリーがどうしても会いたいトービーの馬フェステも皆、所詮死んでしまっている存在なのである。一方、ひいおばあさんのオールドノウ夫人や使用人ボギスは、確かに現実に生きている存在なのだ。好奇心いっぱいの子どものような遊び心のあるひいおばあさんが、時折見せる悲しい表情や、ボギスの話の言葉の端々から、トーリーは厳しい現実を垣間見る。

‘Boggis,’ he asked presently, ‘have you got a grandson?’
 ‘I had, but he was killed in the last war.’
 ‘Well, have you got a son?’
 ‘I had two. But they were killed in the first war.’
 Tolly was upset by this news. How would anything go on if there wasn’t a Boggis? Then he remembered that he was only there himself as if it were sideways, through his mother. (90)

【訳】

「ボギスさんには、孫の男の子がいるの？」と、トーリーはしばらくしてたずねた。
 「いましたよ。でもこの前の戦争で亡くなりました」
 「じゃあ、息子さんは？」
 「二人いました。でも、彼らも最初の戦争で亡くなりました」
 トーリーは、これを聞くとうろたえた。もし、ボギス家の人がいなければ、どうやってこの家はやっていくのだろう？その時、トーリーは、自分が本当のお母さんを通じてここにいるだけなんだ、まるで横道からやってきたようなもんだ、と思い出した。

トーリーは、人生というものは厳しく、時に残酷なものだということを、もうすでに分かっていると言えるだろう。わくわくするような楽しいことや、嬉しいことだ

けあるのが人生ではないということを、自分で身をもって経験して知っているのである。そうかと言って、つらくて悲しいことばかりでないということも、ちゃんと分かっているのだ。だからこそ、この話の終わりの方で、生身の人間の男の子パーシー・ボギスや、ひいおばあさんからのクリスマスプレゼントである本物の小犬オーランドと、実態ある楽しい交流が持てるのだ。そのように成長できたのは、オールドノウ夫人の存在が大きい。しかし、それだけではない。トーリーの想像力に相まって、あの3きょうだいをはじめとするグリーン・ノウの家の様々なものとの交流が、最終的にはトーリーの孤独を癒し、一段とたくましくさせたと言えるのである。

最後にトーリーの今後を暗示する場面がある。

‘Must I go to school next term?’ he asked.

Mrs. Oldknow kissed him good night.

‘I can’t waste your singing on Miss Spudd any more,’ she said. ‘You are going to the choir school at Greatchurch. I think they may let you sing in the choir. How Alexander would have envied you! And of course all your holidays will be here.

‘And your father has written that he wants you to learn to ride.’ (123)

【訳】

「来学期になったら、学校にもどらなきゃいけないの？」と、トーリーはたずねた。

オールドノウ夫人は、トーリーに、おやすみのキスをした。

「学校のスパッド先生の歌の指導には、もうまかせておけないわね。あなたはグレートチャーチの聖歌隊学校に行くのよ。きっと、あの聖歌隊に入れてもらえると思うわ。アレクサンダー(iv)が、どれほどうらやましがることか！そしてもちろん、お休みのときは、いつもここに来るのよ。

それから、あなたのおとうさまから、乗馬を習わせてやってほしいってお手紙でいつてらっしゃったわ」

トーリーとひいおばあさんの最後のこのやりとりは、トーリーが、過去の世界の住人たちだけでなく、ちゃんと現実を見据えて、現実の世界の住人たちとも交流して生きていけるのだという、トーリーの今後の可能性を示唆している。

おわりに

この物語は、美しい空想の世界に、ある真実を描き出している。それは、悲しみや孤独を抱えながらも、人間は生きていかなければならない、という人生の厳しさである。それだからこそ、トーリーやひいおばあさんが持ちあわせているような、想像力や好奇心、ユーモアのセンスといったものが、必要不可欠になってくると言えるだろう。そして、二人のように純粹であればある程、美しいことや嬉しいこと、楽しいことや幸せなことも人一倍経験することができるのだと、著者ルーシー・M・ボストンが、この作品を通して伝えているように感じられるのだ。こうしてこの作品は、7歳の少年がグリーン・ノウの家でようやく自分の場を見出し、自分の真実の人生を始めるまでの有様を描いているのである。

注

- (i) 論文中の原文は *The Children of Green Knowe* からの引用である。
- (ii) 論文中の和訳は、論文執筆者本人のオリジナルである。
- (iii) 著者ルーシー・M・ボストンは、幼少期に仲の良かった兄フランクと、夜の暇つぶしに、暗闇に浮かぶ向かい側の家々の窓を、寝室のカーテンの陰にならんで見ていた。彼女はその様子を、“うっとりするような覗きからくりだった” (67) と表現している。
- (iv) アレクサンダーは絵の中の3きょうだいの一人。3人のなかでもとびぬけてきれいな声をしていた。かつて、家族でグレートチャーチに行ったとき、ひとり、家族から離れて、聖歌隊の台のそばで歌を歌った。その声をききつけた仮面劇の演出家が、国王の御前で、劇中で愛の天使の役を歌うように、アレクサンダーを大抜擢したのだ。彼の歌声は、国王にもたいへん気に入られ、ご褒美にフルートをもらう。そのフルートを、トーリーがおもちや箱から見つけ出しふいている。

参考文献

- Lucy M. Boston, *The Children of Green Knowe* (Faber and Faber Limited, 2000)
- Lucy M. Boston 著/亀井俊介訳『グリーン・ノウ物語 1 グリーン・ノウの子どもたち』(評論社 2008)
- Lucy M. Boston 著/立花美乃里・三保みずえ訳『メモリー ルーシー・ボストン自伝』(評論社 2006)
- Lucy M. Boston, *A Stranger at Green Knowe* (Faber and Faber Limited, 2007)
- Lucy M. Boston 著/亀井俊介訳『グリーン・ノウ物語 4 グリーン・ノウのお客さま』(評論社 2008)

The Children of Green Knowe
— A Story of the Truth in Life —

SHIRAKI Mami